

## 活動事例紹介

子ども・若者が主体的に参画する活動事例の中で、「若者が自らテーマを選び取り、活動を開始した事例」「大人が仕掛け、子ども・若者が大人の支援を受けながらも徐々に参画の度合いを高めていっている事例」について取材をしました。

この章ではそれらの10事例について、代表者や活動の中心となっている若者にその団体及び活動の概要等を執筆していただいたり、取材させていただいた内容をQ&A形式でまとめたりしました。



# フリースペースえん



フリースペースえんは、川崎市の委託を受けて『NPO法人フリースペースたまりば』が運営している公設民営の子どもたちの居場所です。主として学校の中に自分の居場所を見出せない不登校の子どもたちや発達障害・精神障害・非行傾向の若者たちが通ってきます。その年齢層は6歳から30代後半までと幅広くなっています。

特定非営利活動法人 フリースペースたまりば  
理事長 西野博之

## フリースペースえんの活動とミーティング

フリースペースえん(以下「えん」)の居場所づくりで大事にしていることは、「自分は何がしたいか」に気づくことにあります。あらかじめ用意されたプログラムやカリキュラムを持たないようにしています。その日「えん」に来る来ないも自分で決めます。来てからその日一日を、何をして誰とどう過ごすのか、それも自分で決めます。原則としてスタッフは子どもから相談や依頼を受けない限り、口出しや手出しをしないことにしています。

一日の平均利用者数は30人～40人です。様々な背景をもつ異年齢の青少年が過ごしあう場では、ミーティングが重要な位置付けを持っています。週一回月曜日の昼食後に開かれるショートミーティングと、月一回90分くらいの時間をかけて開かれるお茶会ミーティングが定期開催のものです。この場で子どもたちはいま自分がやりたいと思っている企画を提案し、「この指とまれ」で仲間を集めます。「グラウンド借りて野球をしよう」「たき火をしながらバーンクーヘンを焼こう」「水晶を探しにでかけよう」「化石を発掘したい」など、毎月いろいろなプランが持ちよられます。今では恒例の年間行事になっている夏合宿やスキー合宿、フェスティバルなども、毎年このミーティングにかけられ、場所の選定から日程や内容に至るまですべて子どもたちとスタッフが一緒の話し合いで決められます。子どもも大人(スタッフ)も一人一票を持っています。形式にはこだわらず、

司会は子どもの時もあれば大人のときもあります。ここで最も気をつけているのは「言いたいことが言える」ということです。裏を返せば発言の内容で馬鹿にされたり、否定されたりしないということです。その子の成長段階や障害に応じてスタッフがそばについたり、コミュニケーションの仲介をすることもあります。小学生から 30 代のひきこもり傾向の若者までが一緒に参加します。子どもの参画を進めるにあたって、子どもの話を聴く、思いを受け止めるということは、何よりも重要です。スタッフは長い時間をかけて子どもたちが発言しやすい環境づくりに努力してきました。「〇歳になってこんなことも知らない」「歳になってこんな話し方をする」「歳になってこれくらいのこともできない」など、「世間の常識」や「ふつう・あたりまえ」など評価の眼差しを持ちこむと、とたんに子どもは口を閉ざし、動かなくなってしまう。「上手に話ができだね」といった誉め方もしません。うまい・下手などの評価は抜きにして、自分の思いを安心して他者に伝えられる関係づくりがまず基本です。

また子どもの参加は「失敗」を抜きにしては考えられません。失敗を積み重ねる中で、いろいろな気づきに出会います。失敗しても大丈夫という安心感が広がってくると、何事にも子どもたちは生き生きと積極的に取り組むようになるということを、長年、子どもたちから教えられてきました。私たちスタッフが作った「スタッフ心得 15 か条」の一つに、「正しいことは遠慮がちに言おう」というのがあります。人は正論を語ろうとするとつい力が入ってしまいます。まして大人と子どもの関係においては、強い調子で発せられる大人の言葉は、時として威圧的になってしまいます。子ども自身が何をどう間違えたのかを考えるチャンスすら奪ってしまい、新しいことに挑戦することに臆病な子どもたちを作りかねないのです。

あと一つあります。参画を促す際に忘れてならないのは、どんな小さな提案であれ、ミーティングに出されたことをきちんと受けとめ、ミーティング後もその実現や問題解決に向けて具体的に協力してできることから始めてみることです。また、明らかに実現不可能な提案は、ミーティングの段階で聞き流さず、話を最後まで聞いたうえで、その実現のためにクリアしなければならない課題を共有していくように努める必要があります。できる・できないを本人が自分で判断できるように、情報を提供することを忘れてはなりません。自分の意見が聞き流されたり、何も着手されずに放置されたままにされたり、途中から一方的に無理だと言われたりといった経験が積み重なると、当然のことながら、あらゆる場面で参画から遠のいていくこととなります。

## 「壁に絵を描こう」プロジェクト

次に最近の身近な実践の中で、具体的な参画の活動例をとりあげてみたいと思います。

それはある日、少女のつぶやきから始まりました。「ねえ、えんの壁に絵を描かない」川崎市が 10 年 20 年かけて作り続けると宣言して建設された川崎市子ども夢パークです。その建物部分は殺風景なコンクリート打ちっばなしの柱と壁でできています。「えん」に通う子どもたちはここで活動を開始したときから、口々に色を塗りたいと言っていました。「えん」の開設からまもなく一年が経とうとしていた 2004 年 6 月のある日のミーティングで、子どもから「どうせなら絵を描いちゃおうよ」という提案が出されました。これを受けてアートの講座を組んでいる仲間が集まって、図案の検討が始まりました。「夏だからハデなのがいいよ」「カッコイイのがいい」「あんまり細かいと難しいかもよ」などと言いながら、次々に下絵が描かれていきます。相談の末、ポップな色合いと素朴な



表情が人気を集めた 10 代の少年の鳥の絵と、抽象度の高い不思議な模様を描いた 20 代の女性の絵が組み合わされて、ひとつの図案がまとまることになりました。

さて下絵はできたものの、「えん」の入口横の壁は大きいのです。紐を使って採寸してみると、高さ 4.2 m、横 7.3 m もありました。「壁の高いところには、どうやって色を塗ったらいいのだろう」、これがまず大きな課題でした。子どもたちから出された案は、同じ高さの脚立をふたつ並べて、そのうえに板を渡し、足場を皆で押さえながら色を塗ろうという案でした。でもこれだと高いところには届かないし、微妙な高さの調節ができず、かなり作業がしにくくなります。あーでもない、こーでもないと頭を悩ませていたところに、たまたま遊びに来たのが、たまりば O B の 17 才のサトルでした。小学校の時から不登校でしたが、家にこもっていた時期に自宅の外壁の塗装に来ていた業者の仕事っぷりに出会い、15 歳で弟子入りさせてもらい、今はペンキ塗りの若い職人として働いています。天気の関係で仕事がキャンセルになり作業ズボンの姿でやってきたサトルを子どもたちが見逃すわけがありません。さっそくサトルに相談しました。「足場はなんとかできるかも」、そしてサトルはその場で親方に電話で交渉しました。雨の日(仕事の無い日)にトラックを運転できる人を連れてくれば、パイプ・ジョイント・足場の板・保護用のネットなどすべてタダでなんとかしてくれるというありがたい話に展開しました。運転手だけはようやくスタッフの出番でした。結局、足場の材料を運び込んできた日に、その勢いそのまま 17 歳のサトルが一人で足場を組んでしまいました。小・中学生でも塗れるようにと、3 段組にして、保護ネットをしっかりと張りめぐらせてくれました。あっという間の 2 時間でした。その働く姿に 10 代の若者たちからは羨望の眼差しが注がれていました。「カッコイイという言葉はこういう時に使うんだね。」仲間のサトルが組んだ足場に触発された 18 歳のノリと 15 歳のアラシは俄然やる気を出して、まずは壁の水洗いを始めました。これに 14 歳のミギワやスタッフも加わって、全身びしょ濡れになってたわしでゴシゴシとやりました。

次の問題は下絵を壁にどう写すかでした。話し合いの末、まずは壁にビニール紐で縦横 50cm のマス目をつけました。次に縮尺を考えながら原画に同じ数のマス目を書き、その中に番号をつけました。年上の子が段取りを説明して、何番のマスにどのような線を描くか、一人ひとりが確認しました。当初の案ではビニールテープで下絵のラインをつける予定でしたが、すぐにはがれてしまうので、大胆にも原画を見ながら一気にペンキで輪郭を描くことになりました。

この段階ではまだ原画に色はついていませんでした。「どんな色をつけるか」、原画をスキャナーで取り込んだ 15 歳のトウコがパソコンを使って、色づけし、みんなに提案しました。明るい配色の画像が好評で、ここから作業は一気に加速しました。小さい子でも塗れるように壁にキロ・アカと鉛筆で印を付けました。10 代の人を中心にあっという間に 20 人以上の子ども・若者が参加しました。作業は自分のやりたいところを分担して受け持つことに決まりました。ムラのあるところを重ね塗りする人、細かい模様を描く人、鉛筆の線を消す人などなどでした。毎日作業が終わると、「この壁塗りに参加していない他の子たちが遊びで足場に登ってケガをしないように」、きっちりとネットを張って安全確認をしていたノリ。その姿はまさに現場監督のようでした。誰に言われたわけでもないのに、みんな翌日の作業のために毎日筆洗いやペンキの管理、後片付けを率先して行いました。朝は必ず 10 時半に数人の人が集まって、自主的にその日の作業の打ち合わせをしました。10 代の年長者が小学生に作業を教えました。さながら工事現場のような本格的な作業でした。ちょっと危険、でもチャレンジしたくなるような作業を、10 代の若者たちに任せたとのこと、一番わかっていそうな子どもに主導権を渡すことがよかったようです。またある意味「プロ」のサトルが毎日いないのもよかったと思います。小学生の時からたまりばで育ったサトルは見事に裏方に徹しました。足場組みと足場外し以外のことには、でしゃばりませんでした。子どもたちは毎日相談し、イメージを共有しながら進めていきました。このプロジェクトに参加していなかったギャラリーの子どもたちが、通りすがりに「スゴイ」「カッコイイ」と声をかけていたのも、励みになりました。

足場組みから 40 日、全国でも珍しい公設民営のフリースペース「えん」が開設して一周年という記念すべき



2004 年の 7 月、ついに「壁画」は完成しました。「明日から何しよう」、完全燃焼したノリやアラシの口から言葉がもれました。「ムダなことにエネルギー使ってないから、こういう時にエネルギー出せるんだよ」、若者からこんな言葉も聞かれました。抱きあって泣く姿もありました。力を出し切った子どもたちの顔は自信に満ち、満足そうな表情にあふれていました。

この企画で弾みがついた子どもたちは定員 500 人の広い会場を使って、16 もあるプログラムをそろえた年末の「たまりばフェスティバル」を成功させました。ノリは「エスケープ」というグループをつくり、自ら演出・監督・出演した自主映画を、13 歳から 18 歳の若者だけで作りあげ、発表しました。この冬はスキー場に住み込みで 2 ~ 3 ヶ月働くと言い出しました。アラシは出版社でバイトを始めました。今ではバイトチーフとして社員とバイトとの間をつないでいます。年末には新潟地震の被災地へもボランティアに出かけるほど積極的な若者へと脱皮しました。どの子も参画の体験を通じて手に入れた自信の力はとても大きいと思います。

最後にひと言、子どもたちの参画を阻むものとして、大人の見栄とか見てくれを気にする心があります。子どもたちがどうやりたいかより、先生や親がどう見せたいかということに力を入れてしまった場合には、子どものやる気はしぼんでいきます。体裁も評価の眼差しもはずし、子どもの力に応じて「混沌」を楽しむ大人側の余裕の中から、参画の芽が育ってくるのだと思う今日この頃です。



分類	内容		フリースペース		フリースペースえん（居場所における参画・「壁に絵を描こう」プロジェクト）			
	活動主体		NPO法人					
参画の段階	居場所づくり 5 (壁に絵を描く 7)		その理由	居場所づくりは、子どもの意見を聞きながら大人が決定している。壁画では10代の若者が主体的に相談し、準備・実施・片付けも行った				
団体名	特定非営利活動法人 フリースペース たまりば	E-Mail	freespace-en @d01.itscom .net	URL <a href="http://home.b05.itscom.net/tama/np0/index.html">http:// home.b05.itscom.net/tama/np0/index.html</a>				
代表者名	西野 博之		044-850-2055	スタッフ	常勤6名、非常勤3名、ボランティア10名			
実施時期	開設時間 月～金10:30～18:00 (火 14:00まで)	参加人数	登録人数は93名	対 象	不登校児童・生徒、 ひきこもり傾向の若者	年 齢	6歳から30代 の若者まで	
他団体・組織との連携	川崎市子ども夢パーク、神奈川子ども未来ファンド、県内外のフリースクール・フリースペース、チャイルドライン、神奈川思春期サポート懇談会等		活動資金	法人の応援会費委託費・助成金・補助金等				
趣 旨	学校や家庭、地域の中に居場所を見出せない子どもや若者及びその保護者とともに、一人ひとりが安心して過ごせる居場所をつくり、学校外の多様な学びや育ち、生き方を支援し、自己肯定感を取り戻す人間関係を育む環境と文化を創造する。							
実施することになったきっかけ	学校・家庭・地域の中に居場所を見出せない子ども・若者との出会い							
事業(活動)内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 居場所の開設と運営(川崎市から不登校児童生徒の居場所運営事業の受託)</li> <li>* 本人・家族等の相談・援助活動(電話・来所)</li> <li>* 学校外の多様な学び・生き方の支援(夏・冬合宿、「この指とまれ」方式の自主企画支援)</li> <li>* 保護者会・20歳以上の若者とスタッフの茶話会、通信の発行</li> </ul>							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 自分がやりたいことを定期開催のミーティングや通信で呼びかけ、仲間を募る。</li> <li>* ミーティングでは言いたいことが言えるということをお互いに保障(他者の存在を否定しないことが条件)。</li> <li>* 子どももおとなも対等の権利をもつ。一人一票。</li> <li>* 自主的に相談。思い切ったチャレンジ。安心して失敗できる環境の整備。</li> <li>* 世間的評価や見てくれにとらわれずに、やりたいことを追求。</li> </ul>							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり	その他				
	特定非営利活動法人 フリースペースたまりば	青少年と大人	～					
<ul style="list-style-type: none"> <li>* スタッフは子どもから相談や依頼を受けない限り、口出ししない。</li> <li>* ミーティングで場所の選定、日程、内容まですべて子どもたちとスタッフが一緒に話し合いで決める。</li> <li>* ミーティングの司会は、形式にこだわらず子どもの場合と大人の場合とがある。</li> <li>* 大人は発言しやすい環境作りをしている。</li> </ul>								

表の見方は P.55 参照



# 片倉うさぎ山プレイパーク



冒険遊び場(プレイパーク)とは「自分の責任で自由に遊ぶ」がモットーの禁止事項のない自由な遊び場です。

「片倉うさぎ山プレイパーク」には、固定の遊具がありません。廃材やダンボールといった一見ガラクタと思えるものや、草・実・枝・葉・石・水といった自然の素材を利用して、自分たちで遊びを自由につくって欲しい、という思いが冒険遊び場の元となっています。

子ども達の「やりたい」ことが、自分達の手で実現できることが大切だと考えています。そして、実現していく過程の中で何度とない失敗により、子どもたちは大きく成長し多くの知恵を身につけていきます。そのためにできるだけ大人は、禁止事項を減らし、子どもの遊びの発想をできるだけ温かく見守り、子どもだった頃をふりかえりながら、もっともっと子どもと一緒にとことん遊んで欲しいと願っています。

## 片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会 瀬 嵐 理 恵

大学で「意欲とおもいやりを育てる児童学」を学び、その指導方針に沿った東京都区内の私立幼稚園に5年間勤務しました。その園での体験が私の現在の活動の根幹をなしていると思います。

その幼稚園は杉並区でありながら、自然環境に恵まれ、動物や植物を育てるという生きた体験を、園の活動の核としていました。畑での野菜づくりを通して土にふれ、その匂いや感触、虫たちとの出会いを楽しむ年間の活動のなかで、なによりも園児たちが感激するのは、自らの手をかけた野菜を収穫するときでした。たった1本の苗が土の上に根を張り、ツルを伸ばし葉を茂らせ、実りを迎



えます。土の下から赤い色をしたさつまいもが、次から次へと顔を出す瞬間、子どもたちは宝物を見つけたかのように歓声をあげます。自分たちの手足を使い、苦労してなし遂げた体験・感動を通して、子どもたちは何ものにも代え難い貴重な経験をすることができます。

子どもたちの生き生きとした姿をみてきた私は、わが子にも同様な体験をさせたい、という強い思いをもって子育てを始めました。しかし横浜でのマンション暮らしでは、自由に遊べる場は近くの公園しかありません。整備・管理された公園は、子どもたちの好奇心をかきたてられるような場にはなりえないと感じたのです。このことがプレイパーク活動を始めるきっかけとなりました。

子どもが成長するにつれ、子ども会や地域のイベントに参加しました。子どもと楽しく活動しながらも、私自身満たされないものを感じたのです。その理由は、大人が自分たちの頭で考えて作りあげたイベントの企画だからだ、と気づいたのです。地域の子ども会の会長になったことをきっかけに、子どもたちがどんな活動をしてみたいかアンケートを取りました。様々な案が出てきました。子どもたちのアイデアをできるだけ尊重したいと考えましたが、子ども会には予算・活動回数に限りがあります。担当役員が皆で悩みつつ検討した結果、子どもたちの希望をかなえるために、初めての一泊キャンプを計画しました。小学校高学年が中心になって、プログラムの検討、しおりの作成を行い、プール遊び、野外活動や流しそうめん、水を使った運動会、キャンプファイヤー等、楽しい一泊二日を送ることができました。この経験をもとに、子どもたち自らの発案で、クリスマス会や、次年度の女生徒たちがきもだめしの企画を行いました。しかし残念ながら、改選後の子ども会担当役員には受け入れてもらえませんでした。子ども達による意欲ある企画を無にすることを惜しみ、私たちが当時自主活動していた「遊びをひろげようピピの会」でそれらの企画を実現させることにしました。

子どもたちは、おもしろい事が大好きです。「自分たちでできるのだ」という経験と自信を持ち、それを受け止めてくれる大人が地域にいれば、大きな底力を発揮できるのだと実感しました。

うさぎ山プレイパークでは、子どもたちが自主的に考えた企画がいつでも実現できるように、常にアンテナを張っています。開園当初は、こどもたちに「自分の発想でなんでもやっていいのだよ」と気づいてもらうため、毎月いろいろなイベントを企画しました。経験がなければ発想がわからないと思ったからです。

イベントは、子どもたちが公園に初めて足を運ぶきっかけとなります。しかしその場限りで終わることのないよう、うさぎ山プレイパークでは、その場で経験したことが日常的に行える環境を作ることができるように考えています。

子どもたちが参画して行なう一番大きなイベントとして「子ども商店街」があります。世田谷の羽根木プレイパークで行なわれていた「子ども商店街」に参加したメンバーの1人が、子どもの発想のおもしろさに感激し、私たちもやってみたいと考え、企画したのが1996年4月。近隣の施設『ログハウス』の5周年のイベントの時でした。初めての試みでもあり、現金を扱うこともあり、私たちも細かな準備・対応に追われました。

その後、毎年この企画を実施していますが、「子ども商店街」では、現金と換金できる金券を扱うため、子どもたちにとっては大変魅力的で社会経験にもなる反面、トラブルも想定されます。そのためその都度大人も含めて皆で話し合い、この企画の趣旨をしっかりと保護者にも理解いただいています。価値観が多様化している現在、「自由な遊び場だからなんでも自由に」ではなく、主催者側が子どもに伝えたいメッセージはしっかりと伝えていきたいと考えていますし、「子ども商店街」はそのための格好のイベントです。メッセージを受け止めた子どもたちは、仲間同士でコミュ



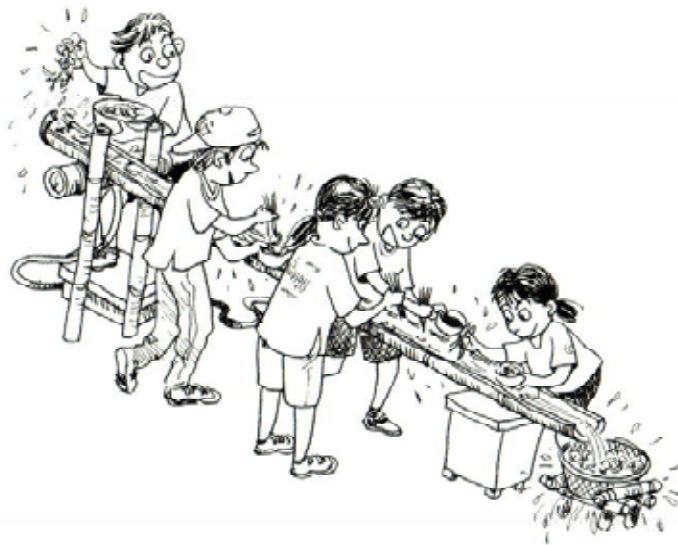
ニケーションを取りつつプロモーションを考え、各々のアイデアを凝らしたそれぞれの「商店」を作り上げていきます。試行錯誤を通じて幾度も壁にぶつかりながら、自らの「商店」を作り上げていく楽しさ、そのプロセスをこれからも大切に見守っていきたいと思います。

今年、うさぎ山プレイパークも4年目を迎え、少しずつですが子どもたちの「やりたい」という声があがってくるようになりました。近いうちに行なう「あそびの林まつり」を実行委員制度にして企画を練ろうと、子どもたちに声をかけをしました。常連の子どもたちを中核として、『子ども商店街』と『ステージでなにか』をしたいという計画が実行されつつあります。日頃の遊びでの活動で培われたアイデアや行動力、仲間やプレイリーダーとの信頼関係が形となって現れる絶好の機会です。大人はあくまでも相談相手であり、子どもたちの思いを引き出し、それをまとめていくだけなのです。プレイリーダーが「あそびの林まつり」に向かって趣向を凝らして作業をしていくなかで、子どもたち一人ひとりが自らの思いを形にまとめあげていくことでしょう。子どもたちがこのような体験を通して社会と関わりつつ、自分たちのかけがえのなさに気づき、自信をもって活動していくことを望んでいます。



分類	内容	冒険遊び場		片倉うさぎ山プレイパーク(子ども商店街)		
	活動主体	NPO				
参画の段階	6	その理由	子どもを主体としたあそび場であり、子どもの発案を大切にしている。スタッフと相談しながら日程や広報の仕方などを決定している。			
団体名	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会	E-Mail	qb3r-sars@asahi-net.or.jp	URL <a href="http://www.asahi-net.or.jp/~qb3r-sars/">http://www.asahi-net.or.jp/~qb3r-sars/</a>		
代表者名	瀬嵐 理恵		-	スタッフ	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員	
実施時期	1997年から毎年	参加人数	60人前後	対象	幼児～高校生年齢程度(子ども商店街の際)	年齢 4～18歳程度(子ども商店街の際)
他団体・組織との連携		特になし		活動資金	一人参加費100円(広告代)	
趣 旨	アイデア・企画・販売すべてを子どもたちが担当。仲間と協力して目標を達成するプロセスを大切にしている。同時にお金の流通の仕組みを理解させ、お金の価値を実感させる。					
実施することになったきっかけ	東京都世田谷区のプレイパークで行なわれた「子ども商店街」に参加し、子どもたちの企画力・実行力に感動したため。					
事業(活動)内容	子ども商店街・・・子どもたちが店作りをして、商品を販売する。					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	子どもたちで発案・企画・仕入れ・店づくり・販売を手がける。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり	その他		
	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員	青少年と大人				
現金と換金できる金券を扱うため、子どもたちにとっては大変魅力的で社会経験にもなる反面、トラブルも想定されるため、その都度大人も含めて皆で話し合い、この企画の趣旨をしっかりと保護者にも理解していただいている。						

表の見方は P.55 参照



# かながわユースボランティアミーティング in 神奈川



『かながわユースボランティアリングファクトリー(KYVF)』は ユース(若者)がボランティア活動を始め  
るきっかけとなる場をつくるために、情報提供、情報交換、そして一緒にボランティアを経験、活動してい  
く場を提供している組織です。その活動をしていく中で『かながわユースボランティアミーティング』という  
イベントも3回目となりました。

## かながわユースボランティアリングファクトリー

代表 刀 衿 い ず み

“かながわユースボランティアリングファクトリー”(以下KYVF)発足のきっかけは、3年前のユースボラン  
ティアミーティング実行委員会でした。これは、神奈川県青少年総合研修センターが募った高校生から大学生  
の5名の青少年を中心に組織され、活動内容は、ミーティングのテーマや分科会内容、進行を自分たちで行う  
というものでした。後に振り返ると、大人である県職員の方が、実行委員会に好きなようにやってほしいという姿  
勢でありながら、事務的、渉外的なフォロー、全責任をすべて背負っていたことが、実行委員である私たちにと  
っては、大変ではあるけれど安心して、多くの人々と関わりながら企画を進めていく貴重な体験が出来ました。  
実施後は、今までに経験したことのないような達成感と感動を得られたのですが、1回限りの事業であることを  
知り、中心となった実行委員で今後も何かつながっていきたいということで、“ボランティア”をキーワードに自  
分たちユース(若者)にできることをするKYVFのもととなる組織をつくることを決意しました。

しかし組織をつくったものの、ゼロからのスタートで、スタッフ間の温度差、日程調整の難しさ、  
スタッフの入れ替わりなど困難は山積みでした。しかし、昨年自主事業として、“ユースボラン  
ティアミーティング in 神奈川 2003”を実行委員会形式で行うということに挑戦し、神奈川県青少年  
総合研修センター、神奈川県青少年協会、かながわボランティアセンターなどの多くの方にお世話に

なりながら、小規模ながらも観音崎青少年の家で高校生の実行委員の活躍で実施することができました。初めての事業ということで、多くの反省点が残し、もう一度スタッフで組織として共通の目的である「ユースがボランティア活動をきっかけに、市民活動の出発点となる社会の様々な課題や矛盾、人々の苦しみや願いなどに気づいてほしい。ボランティア活動が特別なものではなく、誰にとっても身近なものになってほしい。ユースがボランティア活動を始めるきっかけの場をつくるために、ボランティア活動をするユースへの情報提供、情報交換、そして一緒にボランティアを経験、活動していく場を提供していきたい。活動が実り、ボランティア活動がどんな時でも誰にとっても身近なものになり、ボランティアの輪（りんぐ）が広がって行ってほしい。」ということを確認し方向性を明確にし、この夏のユースボランティアミーティングを実施しました。

今回のミーティングも、実行委員会形式でしたが、多くの課題が残りました。はじめに、実行委員や当日参加者を募る段階での広報力です。多くの団体と連携しているにも関わらず結局ほとんどが個人的なツテでなんとか集めたという状態でした。もっとポイントを絞って募集したり、高校や大学など学校へもPRしたりする必要性がありました。協力団体との連絡調整にも重点をおいて進めていくことでより有効的な事業実施がはかれるのですが、その調整を行うだけの人手や時間の余裕がないというも現実でした。次に、実行委員会の進め方、スタッフの段取り力です。私たちスタッフは、自分たちが経験したように、縁の下の力持ち的存在で進めることで、実行委員に自分たちと同じような企画の大変さの後にある達成感、新たな人との出会いの楽しさを味わってもらいたいと考えていました。しかし、スタッフの経験不足や連携不足で実行委員の意識を盛り上げることがうまくできず、結局スタッフが内容まで細かいところまで仕切ってしまう場面もあり、実行委員に物足りなさや不安感をいだかせてしまいました。また、実行委員長がそのプレッシャーのためか、途中で辞退してしまうというハプニングがあり、結局実行委員長は立てずに進めることになりました。このことから、組織として何のために実行委員会形式で行ったかということスタッフで明確にしておくこと、実行委員会をすすめる上でのスタッフのスキルアップの必要性を感じました。今後は、自分たちだけでイベント企画をするということにも挑戦して、実行委員の立場をもっと考えられる機会ももったらどうかという話も出ています。

しかし、実行委員一人ひとりの変化(成長)というものに、スタッフとして喜びを感じたことも多くあります。なんとか集めてもらったという事情で、始めの頃は見るからにやる気がなく、「自分は何をしていいのかわからない、何でここにいるの?」という様子でしたが、一人一分科会を担当することで、意欲的に自分のアイデアを打ち出し、会議進行においてもリーダー的存在となっていきました。また、それぞれの分科会内容も個性豊かで、全体会についてはとても中身の濃いものでした。最後には「とっても楽しかった!またメールで相談にのってください。」などという言葉をもらい喜びを感じました。その後、学校でも他の企画にチャレンジしているようです。些細なことですが、若い時にひとつの企画をするということを通じて多くのことを学び、自信をつけることになったのではないかと考えています。

当日の分科会のひとつに「ボランティアのしょうたい」という、ボランティアとは何かということについてとことん話すものがありました。特に講師を依頼せず実行委員だけですすめるのですが、朝まで熱いディスカッションが繰り広げられました。それほど“ボランティア”は非常に広く考えられ、様々な可能性を持っています。今後も、ユースである私たちがユースに対してできることをできる範囲で働きかけることで、少しずつでもボランティアの輪が広がっていくことにつながっていく活動をしていきたいと思っています。そのためには、組織力のアップ、スタッフのスキルアップと充実、よ



り多くの人に活動を知ってもらい、協力団体の先輩方にも助言をうけながら事業をすすめていくことが必須と考えています。

分類	内容	交流		かながわユースボランティアミーティング in 神奈川			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	8	その理由	大人と青少年が主催者であるが、企画の段階から青少年の考えを中心に行い、大人からは助言や協力をえながら最終的に決定したのは青少年だったから。				
団体名	かながわユースボランティアりんぐファクトリー	E-Mail	koajizumikeda@ybb.ne.jp	URL <a href="http://youvola.serio.jp">http://youvola.serio.jp</a>			
代表者名	刀祢 いずみ		-	スタッフ	大人2、高校生4(実行委員) 大人5、大学生4、高校生1(かながわユースボランティアりんぐファクトリースタッフ)		
実施時期	夏休み 一泊二日	参加人数	48人	対象	ボランティアに興味のあるユース	年齢	16歳～30代
他団体・組織との連携	神奈川県青少年協会、神奈川県立逗子高校ボランティアセンター等	活動資金	子ども未来ファンド事業助成金15万円、神奈川の教育を推進する県民会議より10万円の支援金				
趣 旨	ボランティア活動をする若者世代への情報提供、情報交換の機会をつくります。そして、新たに生まれた繋がりをネットワークしてだけでなく、活動のあり方を見つめ直し、活発な活動を促進していくサポートをします。						
実施することになったきっかけ	2002年神奈川県青少年総合研修センターの事業で知り合った実行委員のその後のネットワークで結成された団体、かながわユースボランティアりんぐファクトリーの自主事業として毎年行っている。						
事業(活動)内容	4月より、ユースボランティアミーティング実行委員について、一般に募集をかけ、高校生以上の実行委員が集まった。KYVFスタッフが実行委員会会議を開催し、サポートアドバイスしながら実行委員会でミーティング内容を考え、講師との交渉なども行った。ミーティング企画内容は、テーマは「ボラ・知識・仲間GET!!」で、6つの分科会に参加者がわかれてディスカッションをおこなった。分科会テーマ：[環境・ひきこもり・手話・障害者理解・ボランティアのしょうたい・ハンセン病] ほか、野外炊事のカレー作り。全体会での分科会の発表などを行い1泊2日のミーティングを終えた。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	企画経験のある青少年スタッフが、経験の少ない青少年実行委員を募り、実行委員会会議をサポートし、お互いに話し合い調整しながら企画をすすめていった。実行委員会の提案をなるべく実現していく形に進めた。講師との交渉や、役割分担などは、スタッフが実行委員と一緒にいった。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり		その他		
	かながわユースボランティアりんぐファクトリー	青少年					
多くの協力団体から支援をえられたが、広報の協力の連携が難しく、当日参加者を集めるのに苦労した。想定していた参加者より大幅に少なかった。実行委員会会議は、基本的に青少年のみで行っていたが、要所所で大人の方々(協力団体の方)にもっとアドバイスをいただきながら進めていったほうがよかった。その反省の背景には、団体スタッフ個人の企画経験や、会議の進め方のスキルが高められていないという現状がある。もっと青少年スタッフのスキルアップが必要であることがわかった。							

表の見方は P.55 参照

# 藤沢ダンスMIX Ver.6



“藤沢ダンスMIX Ver.6”は、市内在住・在勤・在学を含み小学生以上 30 歳以下の者も含むグループを対象として実施されているダンスのイベントです。フリー部門とコンテスト部門があり、フリー部門はダンスパフォーマンスを見せ、コンテスト部門はダンスコンテストを実施するものです。このイベントの企画・運営・実施をしているのが、高校生、大学生、社会人で構成されている実行委員会です。

【お話を伺った方】

藤沢市青少年協会職員 森松 聡 さん、新沼 範之 さん

**Q このイベントのきっかけとなったのは何でしょうか？**

A (財)藤沢市青少年協会 5 周年記念行事の中の1プログラムとして組み込みました。最初にバンドのコンテストにするか、ダンスコンテストにするかで迷いました。継続してやってほしいという声もあり、第 2 回目以降は藤沢ダンス MIX というイベントとして独立させて実施しています。

**Q 実行委員はどのように募集したのでしょうか？**

A 市の広報などで公募していますが、なかなか集まりません。第1回目から継続してやっているメンバー、継続のメンバー、新メンバー 4 名の全部で 16 名。その内訳は、高校生リーダー研修の修了者などに声をかけて、やってくれるようになって継続でやっている者、慶応大学の大学祭の実行委員 2 名、ダンススクールに声をかけて入ってくれた高校生・大学生、昨年の優勝チームの仲間からの 2 名などです。社会人というのはフリーターです。

**Q 職員は何人に対応していて、どんな役割でしょうか？**

A 常勤職員、非常勤職員各1名です。1 回目の委員会では、司会を務め、継続の実行委員に前回までのイベントの内容について、説明してもらいました。2 回目以降は実行委員長と事前に打ち合わせをして、何を話し合うかを決めて委員会に臨み、職員は手を出さないようにしました。しかし会場の職員やダンスのプロである

コーディネーターとの折衝などは担当しました。

イベント当日は、他の職員 6 名が実行委員の手薄なところを協力しました。

**Q 実行委員会は何回実施し、その中で職員として苦労した点は？**

A 全部で 11 回です。実行委員長は 1 回目に継続して参加している者が立候補して決まりました。継続のメンバーが多かったため、新メンバーはわけがわからず、意見を出しにくい雰囲気になってしまいました。そこで委員長と話し合い、新メンバーに新しい意見を出してもらうように工夫してほしいと持ちかけました。しかし公開予選会前の 6 回の委員会までは、新メンバーの意見はなかなか出ずに苦労しました。またそのことが原因だと思いますが、実行委員と職員とのダンスコンテストに対するイメージの違いがあり、上司を含めて共通理解を図るのが大変でした。公開予選会をこなした後は、一つのことを実行委員会で成し遂げて、まとまりができお互いに話ができるようになり、共通理解が図れるようになりました。

**Q 1 回目を立ち上げるときにも実行委員会形式だったのでしょうか？**

A 実行委員会形式です。ただしメンバーは協会の理事などの大人の方が多く、青少年は協会の関係者であり、手探りの状態でしたが、大人が主導で進めました。2 回目以降は独立させたわけですが、高校生、大学生の参加できる数少ないイベント、若者が本当にやりたいと思っているイベントとして、職員は継続性を求めました。若者のやりたいという声もありましたが、理事からも継続してやるべきであるという意見がありました。また、参加者の声として普段ダンスをしている子どもへの親の評価は低かったのですが、コンテストに出たときの一生懸命な姿を見て、自分の子どもとダンスそのものを見直したという声もありました。2 回目以降は実行委員を公募するようになりました。

**Q 実行委員の役割は？**

A イベントの枠組みは職員で決めています。例えば、フリー部門、コンテスト部門の 2 つで実施し、時期・会場は決めてあります。この枠組みの中で実行委員会が企画・内容を決めます。そして当日の運営をしています。企画の中でなかなか決まらなかったものは、賞品類です。若者たちが本当にほしいものとして、CD ラジカセに決まりました。これは実際にダンスをしている実行委員の意見が強くそうになりました。また以前はトロフィーでしたが、部屋の中で邪魔にならない盾にしました。そして賞状はチームの全員に手渡すようにしました。また広報についても、実行委員が考え実施しました。例えばポスター、リーフレットのデザインを考え、作成しました。その中でアイデアとして参加チームの名前をポスターに載せるというのがあり、それが好評でポスターがほしいという参加者の声が上がりました。

今までは実行委員会の次第は委員長が作っていましたが、来年度は各委員が分担して作成することも考えています。

**Q 実行委員の若者の変化はありましたか？**

A 素直に意見が言えるようになり、明るくなって、自分の素<sup>す</sup>を出せるようになった子もいます。この子は実行委員会は初めてで、最初はどう意見を言っているかわかりませんでした。職員が何でも言っているんだと言って、少しずつ変わっていきました。また実行委員会を通じて、新しい友達や絆ができた気がするというものや来年もやってみようという声もありました。最初はぎくしゃくしていたものが公開予選会以降は、よくまとまって一丸となって本選を実施することができました。自分たちで考えを出し企画を組み立て、運営実施ができてうれしいというものもありました。

## 実行委員会活動に参加して

藤沢ダンスMIX Ver.6実行委員長 島山 昭子

私は藤沢ダンス MIX の実行委員会活動を通して、一つの事を皆で協力し合い、成し遂げる事の楽しさを知ることができました。年齢も学校も違うメンバーたちと、5ヶ月の時間をかけて作り上げる藤沢ダンス MIX は、ただダンスを作るというだけのものではなく、私にとってはとても大切なものです。

私は高校 2 年生から実行委員会をやり始めて今年で 3 回目なのですが、それぞれの年によって、実行委員会のメンバーや雰囲気が違うので、毎年わくわくしながら実行委員会に来ています。私が今回実行委員長をやって、一番大切だった事は、今までのメンバーと今年から参加しているメンバーとの壁をなくす事でした。メンバーの半分が昨年から引き続き実行委員をやっていてメンバーだったので、昨年の話などが盛り上がってしまうと、今年からのメンバーはどうしても話に加わる事が難しくなってしまう、メンバーの間に壁ができてしまう形になってしまいました。どうすればスムーズに全員が話し合いに参加できるのかがわからずに、最初のうちはとても悩みました。青少年協会の担当の職員さんたちや、副実行委員長、昨年からのメンバーたちと話し合い、少しずつ改善していきました。6 月に行われたダンスの予選会の後からは、一つの事を皆で成し遂げた事でメンバーの結束力も強まっていきました。メンバーは社会人と学生なので、普段の会議に全員そろう事はほとんどないのですが、休んでいるメンバーへの配慮など、お互いが気遣えるようになり、助け合えるようになってきたときには、とても嬉しかったです。実行委員会が終わった今でも交流しています。

もし私がこの実行委員会に入っていなかったら出会う事ができなかったであろうメンバーと出会い、仲良くなっていくのは、とても嬉しいです。普段の生活では触れあう事のない人たちと出会う事で、視野が広がり、自分自身も成長できる気がします。また、ダンス大会という事もあって、出演者も私たちと年齢が近く、本番前のステージなどで励まし合ったりして仲良くなったりします。そのメンバーたちが公園などでダンスの練習をしているときに声をかけると、「来年こそは優勝します！見ててください！」と言ってもらえるのが、とても励みになりました。

次に会議の中で一番難しかったのが、賞品選びでした。何グループまで賞品をあげるか、何をあげたら喜んでもらえるのか、これに一番時間をかけました。後に残る物でダンス大会らしい物。皆が喜んでくれて、実用的な物。条件はいくらでも出るので、条件に合う物はなかなか見つからなくて苦労しました。しかし、本選の表彰式の後、賞品を貰ったグループの人たちが、賞品を見て嬉しそう顔をしているのを見たときは、たくさん悩んだ苦労も忘れてしまうくらい嬉しかったです。出場者たちのダンスはどのダンスもすばらしく、皆のやり遂げたすがすがしい顔を見ていると、一緒にダンスを踊った気分になりました。真剣にダンスをしている皆の姿を見ていると私まで手に汗を握ってしまうほどでした。

最後に、私が藤沢ダンス MIX の実行委員会の活動を通して最も感じた事は、裏方の大事さです。私たちが行ったのはダンスの大会ですが、お祭りでも花火大会でも、裏方なしでは行う事ができないと思います。実行委員会に入る前までは、裏方の仕事は頑張っても皆に気づいてもらえないし、肝心な本番は見る事ができないし、あまりやりたくはないなぁ... と思っていたのですが、実行委員会をやってからは、たとえ裏方でも人から感謝される事は重要だと思い、頑張れるようになりました。このように考えられるようになったのも、藤沢ダンス MIX の実行委員会に入ってからです。今考えると、とてもよい体験になったと思います。ダンスで出場するグループにも、実行委員会のメンバーも共に成長していける藤沢ダンス MIX をこれからもずっと続けていってほしいです。そして、藤沢ダンス MIX の実行委員会で体験した事を生かして、頑張っていきたいと思います。



分類	内 容		ダンス		藤沢ダンスMIX Ver.6		
	活動主体		実行委員会				
参画の段階	6		その理由	青少年協会が主催して、実行委員を募集した。最初は協会職員主導だったが、最終的には実行委員が主導で、職員とともに決定し、事業を実施した。			
団体名	藤沢ダンスMIX Ver.6 実行委員会	E-Mail	youth@cityfujisawa.ne.jp	URL <a href="http://www.cityfujisawa.ne.jp/~youth">http://www.cityfujisawa.ne.jp/~youth</a>			
代表者名			0466-25-5215	スタッフ	社会人4人、大学生10人、高校生2人		
実施時期	夏休み(8月29日)	参加人数	230人	対 象	藤沢市内の小学生以上30歳以下の者を含む2人以上のグループ	年 齢	6~30歳
他団体・組織との連携		藤沢市・藤沢市教育委員会、 レディオ湘南		活動資金	委託費 1,165,000円		
趣 旨	ダンスを通し青少年が目標に向かって努力することにより、達成感を得るとともに青少年達の活力・創造性を高めることを目的としている。						
実施することになったきっかけ	青少年の間でブームとなっている						
事業(活動)内容	藤沢市内のダンスに興味がある青少年を集め、フリー部門、コンテスト部門の2部門に分け、予選会を行い、審査員により本選への選考を行う。本選に選ばれたチームはプロダンサーの審査員により選考を行い、選ばれたチームには賞を与える。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	企画運営、安全性などの面を職員と一緒に決定した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり			その他	
	(財)藤沢市青少年協会	青少年と大人					
出場者のことを第1に考え、出場者の誘導方法、賞のあり方(賞品の内容)まで実行委員が主体的に検討した。また、実行委員が一つにまとまり、なおかつ自分の意見を言えるようになるまでに時間がかかり最初の方はなかなか会議が進まないこともあった。そこで、実行委員長や副実行委員長と会議の進め方を工夫検討し、全実行委員が意見をはっきり言えるようにしむけた。外部(会場の舞台課やコーディネーター)との打ち合わせは基本的に職員が行った。							

表の見方は P.55 参照



## アウトドア活動教室



“港北区ジュニアリーダーズクラブ”は、中学生から 26 歳までの会員で構成され、自主活動及び港北区子ども会連絡協議会の依頼で行事のお手伝いをしています。アウトドア活動教室は、夏に 3 泊 4 日のキャンプを実施する自主活動です。

【お話を伺った方】

港北区ジュニアリーダーズクラブ会長 関口 秀雄さん 他 6 名

**Q 港北区ジュニアリーダーズクラブはどんな活動をしているのでしょうか？**

A 菊名地区センターで週 1 , 2 回の会合を持ち、行事の計画や予算、スケジュール等を決めています。会員は中学生から 26 歳までいます。特に上限は設けていません。会長は高校を卒業しているものやっていますが、活動の中心は高校生です。会の自主活動としては、定例会(「こどもの国」などを利用した日帰りのイベント)、冬・春に小学生を対象にした宿泊研修会、夏に 3 泊 4 日のアウトドア活動教室を実施しています。また港北区子ども会連絡協議会の依頼で子ども会行事のお手伝いをしています。それが年間 50 回程度で、行事によって異なるが 3 ~ 10 人を派遣しています。

**Q 忙しくて大変だと思えますが、活動を継続している魅力はなんですか？**

A 子どもたちと触れあうことができ、また自分たちで話し合っって企画したものを実現できることが魅力です。

**Q 区の職員の関わりは？**

A クラブの手助けをしてくれています。施設利用の際、会場借用の際に許可をとってくれます。区役所の印

刷機を貸してもらえます。行事への参加をして、協力してくれます。

**Q 高校生が中心ということですが、それより上の世代はどのような役割があるのでしょうか？**

A 高校を卒業しますと、意識が変わります。高校生が中心になって動いていますが、彼女たち(現在は女子のみ)の考えを生かせるように手助けしています。またうまくいっていないときなどは指導をすることもあります。

**Q 高校生は自分たちが主体だと思って活動しているということですが、その存在をどう思っているのでしょうか？**

A 行事を成功させたい、参加者に楽しんでもらいたいという気持ちが強く、高校生の人数が少ないので、助け合ってやっています。そんな中で先輩たちは心強い存在です。しかし余計な口出しをしてほしくないと思ってしまうこともあります。

**Q アウトドア活動教室について教えてください。**

A 地域の掲示板に手作りのポスターを貼ったり、回覧板などを通して、中学生を公募します。高校生が企画を立て、一般の中学生、中学生会員と他の会員、区の職員の参加で実施しています。キャンプ中は班の中に「班つき」という形で、高校生が中学生の班に入ります。リーダー役を演じますが、中学生の自主性を大切にしています。

3ヶ月前から準備を始め、メインプログラムのウォークラリーのために下見をしたり、7月に1泊2日のプレキャンプをして、テント生活、パッキング、野外炊事等の研修をします。3泊4日は長いようですが、終わってみるとあっというまです。むしろもっと長いものにしたいという意見もあります。

**Q ジュニアリーダースクラブの活動を通して、自分が変わったという点がありますか？**

A

- ・考え方が変わりました。自分が中心でいつも考えていましたが、周りの人間を見て行動できるようになりました。
- ・性格が変わりました。性格が暗かったのですが、明るくなったと思います。会議などで意見を言えるようになりました。これは仲間がきちんと聞いてくれることが大きいと思います。また大人と普通に会話できるようになりました。
- ・自分中心だったのが、相手の意見を聞けるようになりました。
- ・人見知りでおとなしかったのですが、連絡係という仕事を任されたのをきっかけに、慣れることで人と普通に話せるようになりました。大人とは緊張してうまく話せませんでした。敬語も覚え、緊張感も薄れ、話せるようになりました。親は責任感が出てきたといっています。
- ・考え方が変わりました。物事を順序立てて考えられるようになりました。落ち着いて考えることができるようになってきました。突発時にも以前よりも、冷静に対処できるようになってきました。考える力がついたと思います。
- ・性格が変わりました。以前はすごい気を遣っていましたが、今は大人と普通に話せるようになりました。
- ・性格が変わりました。後ろ向きでしたが、プラス思考に変わってきました。子ども会活動に参加するようになって、親の人たちと接するようになって、大人との話し方を覚えました。中学2年生から参加して、今は高校を卒業していますが、高校生スタッフの時に、中学生を楽しませたいという気持ちが強く、それが今でも継続している理由だと思います。

## ジュニアリーダーの活動をやってきて

### 港北区ジュニアリーダーズクラブ

会長 関口 秀雄

僕は港北区ジュニアリーダーズクラブ(以降、港北区 JLC )の活動をやってきていると経験することができました。

子ども会のクリスマス会のお手伝いや区役所の区民祭りのお手伝いなど、普通の生活をしていたら経験できないことをたくさん経験することができました。特にジュニアの活動の中で一番印象に残っているのが「アウトドア活動教室」です。

毎年 8 月上旬に 3 泊 4 日で山梨県にある横浜市道志青少年野外活動センターキャンプ場(横浜市少年自然の家赤城林間学園で実施する場合があります)でキャンプを実施します。中学生以上 30 ~ 40 人を毎年連れて行きますが、山登りや野外炊事などはすべて自分たちで行わないといけません。また自然を使ったウォークラリーや川などでゲームをやったりします。そしてやはり最後の夜に実施するキャンプファイヤーはとても素晴らしいものです。

山奥に行き皆で火を囲み歌ったり、踊ったりして、だんだん仲間たちがひとつになっていくことがとても楽しいし有意義だと思います。

港北区 JLC の活動は、大人の手を借りないで高校生が中心になって企画・運営していますが、このアウトドア活動教室もそうです。準備段階の話し合いに約3ヶ月かけています。週 2 回の打ち合わせ会議を中心にいろいろな話し合いを行い、何度も企画を練り直します。やっとの思いでプログラムが決まったときはもううれしくてたまりません。

このように普段経験できないことを経験できるのは、港北区 JLC の活動をやってきたからだと思います。

僕は現在会長という立場にあるので、今まで港北区 JLC の先輩たちから教えてもらったことをこれからスタッフになる高校生にどんどん教えていこうと思います。そしてジュニアリーダーが子どもたちのためになるようにこれからも活動を続けていきたいと思っています。





分類	内容		アウトドア活動教室			
	活動主体	キャンプ	ジュニアリーダー			
参画の段階	8	その理由	子どもが主体的に関わっているから			
団体名	港北区ジュニアリーダーズクラブ	E-Mail	なし	URL http:// なし		
代表者名	関口 秀雄		045-540-2239 港北区 地域振興課	スタッフ	大人、大学生、専門学校生、高校生、中学生	
実施時期	夏休み3泊4日	参加人数	32人(大人3, 高校7, 中学校13, 専門学校・大学8)	対象	中高生	年齢 12~18歳
他団体・組織との連携	港北区地域振興課		活動資金	参加費1人9,000円、区補助金170,000円		
趣 旨	自立心、協調性の育成。高校生にとっては、リーダーシップの育成になり、中学生にとっては団体活動を学ぶ場となっている。中・高校生、専門学校、大学生の交流にもなっている。					
実施することになったきっかけ	特になし					
事業(活動)内容	横浜市道志青少年野外活動センターキャンプ場にて野外炊事、ウォークラリー、野外ゲーム、WATER GAMEを実施。反省会(毎日1時間以上、運営について反省会を実施、高校生のリーダーシップの取り方についてみんなで話し合う。)					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	基本的に20歳未満の子どもが企画運営している。野外炊事のメニューの決定、中学生への指導、ウォークラリーにおける企画立案(ウォークラリーのチェックポイントで行う人生ゲームの内容を決定)、野外ゲームの内容決定、反省会等。大人はバスの手配等、事務的な支援のみ。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり		その他	
	港北区ジュニアリーダーズクラブ	青少年				
子どもたちが企画運営のノウハウを持っているので、大人は補助的に関わるのみ。一部企画・立案に関わっている。						

表の見方は P.55 参照

